父を語る

学長 鈴木宗音

鈴木修学は明治三十五年愛知県に生まれた。修学が社会事業の道に入ったのは、昭和初年法音寺に入門した時に始まる。法華経を拠り所として心の救済と同時に物心両面の救済を目ざす法音寺で最初に手がけた仕事は、ハンセン氏病療養所の運営であった。ここでは終始財政難につきまとわれるが、そのため婦人会、寺院、教育団体におもむいて実状を訴え資金援助を請うた。後年、「真心をもって話すならば、話はつかなくてもよく理解してもらえることを知った。講演が上手だといわれることもあるが、それはこの事があったからだろう」と語っていた。この事業を通じて将来の大規模な社会事業への教訓を学んでいる。事業は資金運営をよく考えてすること、地域住民の理解協力が必要なこと、などであった。しかし、生涯に亙る事業を見てみると、二つ目の地域社会の人達の理解と協力を得ることはいつも考えていたようであったが、資金と生産の道を考えて事業を行うことは、新事業を始める時いつもそんなことは度外視し、全く反対の信念をもって行った。特に大学設立と形成期に当っては、絶え間ない財政難に見舞われながら前進を続けたのである。正しい事を行えば金は後からついて来る、の信念であった。施設に対する公費助成についても、「こちらから頭を下げるのではなく、向うから御用聞きに来るのが社会福祉だろう」と一向に頓着しない面があった。自立心の強さがうかがえるが、日頃の温和な人柄からどこにそんな強さがあるのか不思議であった。社会福祉にたずさわる者は物を大切にし、少しでも余剰があれば事業に廻すべきだという考えから生活は質素なものであった。着るものには余り頓着なく、食べるものはウドンが大好物であった。子どもたちへの教育は叱るよりも誉めることを心掛けていた。何も取り得のない子どもには掃除をさせそのできを誉め、何かと子どもに自信をつけさせるよう心掛けていた。戦前、養護施設の子どもたちの就職がむずかしかった時、台湾に広大な土地を買いそこに子どもたちが自由に働き生活できるような場をつくろうとした。時々思いもつかない大ロマンを実行しようとしたが、新しい時代の社会福祉の人材を育成しようとする大学の設立も、利害を離れた何か大きなロマンを求めようとしていたような気がしてならない。死後、遺産は生命保険すらもなかった。良き明治人の一人であり、信仰と福祉、教育の中に燃えつきた一生であった。